

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12930

研究課題名（和文）江戸期における玉藻前説話の研究

研究課題名（英文）The Study of Tamamonomae Stories in Edo Period

研究代表者

馮 超鴻（FENG, Chaohong）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・その他（招聘研究員）

研究者番号：30879705

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：室町期に出現した玉藻前説話は、江戸期においてさらなる発展、変貌を遂げた。本研究はその発展の具体的な様相を追究し、その過程において如何に日本の伝統を踏まえながら、中国文学の影響を受けたかに注目した。

まず、江戸期の玉藻前説話の集大成である『絵本三国妖婦伝』の解説に取り組み、著者が如何に先行の狐譚を踏まえて改編を行ったかを浮き彫りにした。また、『勸化白狐通』がこの発展の過程において承前啓後の役割を果たしたと指摘した。さらに、『画本玉藻譚』と『絵本三国妖婦伝』に見られる「同形二人」の趣向を分析し、ジャンルが異なる文芸作品にも目を向けながら、一連の玉藻前作品群の視点から趣向の出現について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

室町期に発生した玉藻前説話は江戸期に至ると、中国文学より多くの要素を摂取しつつ、さらなる発展をなし遂げた。江戸期の玉藻前説話を研究する上で、中国文学の視点が不可欠であるが、多くの先行研究ではその方面の研究が十分になされていない。本研究は日中両国の古典文学に目を向け、日本の伝統を踏まえて玉藻前説話が如何に変貌したのかを考察すると同時に、中国文学を如何に吸収して変化を成したのかも明らかにした。これらを通して、従来の研究の空白を補った。このことは、江戸文学における中国文学の受容の一つの具体例として提示することができ、江戸文学研究という大きな枠組みにおいても学術的意義を持つと考えている。

研究成果の概要（英文）： The stories of Tamamonomae appeared in Muromachi period, and their contents kept on developing and presented different literary styles after Edo period. This study tries to address two questions: First, how did the Tamamonomae stories gradually evolved and changed in Edo period? Second, what impact and influence of Chinese literature were posed on the development of these stories?

To be specific, this study dedicates to the literary interpretation of “Ehonsangokuyohuden” (the masterpiece of Tamamonomae stories in Edo period) and the analysis of how Ranshan Takai (the writer) adapted the story contents based on previous fox tales. Meanwhile, this study shows concern on the content of “two people in one body shape” in the literary works “Ehontamamobanashi” and “Ehonsangokuyohuden”, and tries to analyze how it was integrated into these works, from a broader perspective of “Tamamonomae story groups” and with reference to other literary and artistic pieces at that time.

研究分野：人文学

キーワード：玉藻前 狐妖 比較文学 日本近世文学 中国古典文学 読本 実録的写本 通俗軍談

1. 研究開始当初の背景

現時点で把握可能な玉藻前説話の最も古い文献は、室町期文明二年(1470)の年紀を持つ御伽草子「玉藻の草子」まで遡る。江戸期に下ると、玉藻前説話は中国小説から多くの要素を摂取して発展した。江戸期に変貌した玉藻前説話を分析するには、中国文学の影響を閑却できない。しかし、多くの先行研究では、中国文学の角度からのアプローチが十分になされていない。加えて、玉藻前にまつわる江戸文学作品の中には、いまだ研究がなされていないものも多く、玉藻前説話の変化の具体的な様相もはっきりとしていない。さらに、従来の研究は特定の一、二の作品に注目するだけで、玉藻前説話群の全体像を鳥瞰し得ない断片的なものが多い。特に江戸文学の発展の流れ、という史的な角度からの分析が希薄である。

研究開始当初では以上の学術的背景に鑑み、日中両国の文学に目を向け、考察が不十分な個々の作品を発掘して研究の土台を作り、江戸期の玉藻前説話群を俯瞰してその全体像を系統化して考える、という研究の計画を立てた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、文献調査と分析を通して、江戸期における玉藻前説話の形成と発展を系統的に解明すると同時に、江戸文学と中国文学との交渉の実態を追究し、ひいては江戸文学の史的展開の様相を明らかにする、という三点である。

主に以下の三つの問題の解明をめぐる研究を進めた。玉藻前説話が江戸時代の約三百年間で、どのように発展、変化してきたのか、この変化の過程において、いかに中国文学の影響を受けたのか、この変化は、江戸文学の展開史において、いかに遂げられたのか、の三点である。

3. 研究の方法

(1)研究の方針の角度

ミクロとマクロを兼備する研究方針を取った。室町期に出現した玉藻前説話は江戸期に入り様々な分野に亘って変化を遂げた。その分野は、浄瑠璃、歌舞伎、浮世草子、通俗物、勸化物、読本、実録物等、多岐に亘る。本研究では、ミクロの視点を以て玉藻前にまつわる個々の作品を、時系列に沿って縦軸に据えると同時に、その時代の他の文芸作品を横軸に置き、マクロの視点を以て作品が所在する分野の特徴も意識し、縦横二つのベクトルから個々の作品を考察した。

日中双方の文学から分析する研究角度を定めた。日本文学は古くから中国文学の薫陶を受けており、江戸期にはさらに国学と漢学の興隆が見られた。江戸期の玉藻前説話も中国文学から新たにエッセンスを加えつつ発展してきた。本研究では、日本文学に限らず両国の文学の関係性に注目して考察した。

(2)具体的な研究方法

文献の調査・収集。

本研究では実録的写本『三国悪狐伝』を取り上げた。山下琢巳「実録的写本『悪狐三国伝』の成立について」(1989)では、蔵本の『三国悪狐伝』には「寛政九年」(1797)の年紀が記載されていることを踏まえ、『三国悪狐伝』の成立年次を「寛政九年」頃と推測した。筆者は、本課題の研究期間内に「寛政九年」の年紀を持つ伝本を入手し、必要な文献資料を備え、研究の基礎を整えた。

文献研究と分析。

江戸期の玉藻前説話の発展の様相を概括し、その発展の過程を「始動期」(1603~1765)、「変換期」(1766~1802)、「隆盛期」(1803~1805)、「余響期」(1806~1867)の四段階に分けた上で、各期の主な作品を精読し、作品相互の影響関係や継承関係を明らかにした。玉藻前にまつわる個々の作品を分析する際に、ジャンルが異なる江戸文学の各分野との関連にも留意した。

4. 研究成果

(1)江戸期の玉藻前説話の集大成である読本『絵本三国妖婦伝』の解読

『絵本三国妖婦伝』の形成について。

作者・高井蘭山による序文に「愚 觚を操りて修飾し、北馬子 丹青を以て潤色す」とある。ここにおける「修飾」は、文章の加工潤色や推敲の意味を持ち、蘭山が先行する狐譚を利用し、自ら改編を施したことを意味している。本研究では、この「修飾」に着眼し、蘭山が如何に改編を行い、作品に特色を与えたかを浮き彫りにした。

具体的には、蘭山がおおむね実録的写本『三国悪狐伝』と『通俗武王軍談』に依拠しながら、先行作品と異なる、王威に服従し陰陽師・安倍泰親の法術に対抗できない無力な玉藻前の形象を新たに作り出した点や、『三国悪狐伝』と『通俗武王軍談』の内容を合理的に融合するため、『三国悪狐伝』の狐変褒姒を、『通俗武王軍談』の龍の精の化身である褒姒と融和させ、雲中子を我鬼先生と一体化させた点などが挙げられる。

当該作品における「耆婆による狐退治」話型について。

江戸期の玉藻前を題材とした作品群において、名医・耆婆が狐変妖婦である華陽夫人を退治し、天竺国を累卵の危機より救ったヒーローとして描かれている。仏典において、耆婆は人間の五臓六腑を見透かす薬王樹を持つ人物として知られるが、狐妖退治まして玉藻前の退治には関わらない。本研究では、なぜ江戸期の玉藻前説話には狐妖を退治した耆婆が登場するのか、耆婆がどのように盛り込まれてきたかについて分析を試みた。

具体的には、まず読本『絵本三国妖婦伝』における耆婆の物語に注目し、実録的写本『三国悪狐伝』を經由して、その祖型を勸化物『勸化白狐通』に求めた。次に、内容の比較分析を通じて、『勸化白狐通』において中国の狐話集『狐媚叢談』と、中国講史小説を和訳した『通俗武王軍談』の内容が摺り入れられていることを明らかにした。それを踏まえてさらに、『狐媚叢談』の「華表照狐」の一話における「木で狐妖の正体を暴く」という趣向に着目し、『勸化白狐通』の作者がこの一話の影響を受けて、耆婆が持つ薬王樹に狐妖退治の効能を与えたと考えた。

(2)承前啓後の役割を果たした勸化物『勸化白狐通』と実録的写本『三国悪狐伝』の研究

『勸化白狐通』の著者は先行の狐譚を利用して、中世の「玉藻の草子」と異なる新たな内容を案出した。作品の比較分析によって、著者が通俗物『通俗武王軍談』、中国明代の漢文小説集『狐媚叢談』のほか、暦数書『篋篋抄』を参考にしたことが分かった。これらの書物を駆使しながら、著者が「玉藻の草子」に登場する玉藻前と安倍泰成に、それまでにない「術比べ」の内容や斑足王の誕生譚などを加筆し、人物に新たなイメージを与えたと考察した。さらに著者・海誉の出自についても研究を進めた。

過去の資料調査により、実録的写本『三国悪狐伝』が主に二十六条の標題を持つ形態になっていることが分かった。本年度は書名に「悪狐伝」を有しながら、唐土と天竺の内容を切り捨て、専らに本朝に注目する『玉藻前悪狐伝』を新たに発見した。また、写本『三国悪狐伝』の内容の変貌に注目して分析した。この他、「寛政九年」の年紀を持つ『三国悪狐伝』の伝本を入手し、その特徴を分析した。

(3)読本『画本玉藻譚』と『絵本三国妖婦伝』に見られる「同形二人」の趣向の分析

『日本国語大辞典』では「同形」について、「形が同じであること。性質・様子などが同じであること」としている。本研究では、話中に「同じ姿で登場する二人」を「同形二人」という語で言い表し、着目した。

『画本玉藻譚』と『絵本三国妖婦伝』では、祈禱によって陰陽師・安倍泰成に正体を暴露された玉藻前が、さらに那須野に逃げ込んで民衆を悩ます。その際、領主の妻と同じ姿の女性に変じることが、真偽を見分けられない領主は上京したのち照魔鏡を以てこれを退治する。ここでは、「同一の姿に化する」内容が二つの読本に何故盛り込まれたかについて、作品およびその前段階の狐譚を分析すると同時に、当時の民衆文芸にも注目しつつ考察した。

結論として、『勸化白狐通』や『泉州信田白狐伝』のような前段階の狐譚に既に「同形二人」の趣向が見られ、前述の二つの読本はそれを踏まえていると考察した。また、享保初期前後の近松門左衛門の浄瑠璃『双生隅田川』や『弘徽殿鶉羽産家』などの演芸の分野でも同形の人間に化する「双面」の趣向が見出せる。これらの「双面」の趣向を吸収し、「同形二人」を作中に織り込んだとも考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 馮 超鴻	4. 巻 24
2. 論文標題 『絵本三国妖婦伝』における耆婆と移狐樹をめぐって 中国小説との関わりから	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国古典小説研究	6. 最初と最後の頁 43-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 馮 超鴻	4. 巻 29(2)
2. 論文標題 読本『絵本三国妖婦伝』の「修飾」をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学大学院教育学研究科紀要：別冊	6. 最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 馮 超鴻
2. 発表標題 『三国悪狐伝』について
3. 学会等名 日本女子大学文学部学術交流シンポジウム「講談「玉藻の前」と江戸文芸」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 馮 超鴻
2. 発表標題 近世玉藻前説話における『勸化白狐通』の位置 先行狐譚の継承と発展に着目して
3. 学会等名 令和五年度日本近世文学学会春季大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------